ジャパン・ハウス ロンドン

「Ainu Stories: Contemporary Lives by the Saru River」展 内覧会における林肇駐英国日本国大使挨拶（仮訳）

御列席の皆様、

「Ainu Stories」展のオープニングに参加できることを大変嬉しく思います。この展覧会は、生きて進化し続けるアイヌ文化に新たな光を当てており、ここ英国で前例のない機会であると自負しております。今宵、遠藤桂一北海道平取町長、木村弘美平取アイヌ文化保存会事務局長、加藤博文北海道大学教授という、アイヌ文化の発展に尽力し続けている著名な方々に御臨席を賜ることができ、大変嬉しく思っております。御列席の皆様を歓迎いたします。

アイヌ文化は、他の地域の文化と同様、日本の伝統として欠くことのできないものです。アイヌ文化を支え、促進していく今日の取組を支援することは、私たちの世代の責任です。日本政府も、2020年の「民族共生象徴空間」（ウポポイ）の設立を含め、そのような取組を進めております。

本日からジャパン・ハウス ロンドンで開催される「Ainu Stories」展を通じて、アイヌの文化、言語、生活様式、信仰、考え方などをより身近に感じることができます。この体験をきっかけとして、アイヌの伝統やアイヌ民族についてもっと知っていただき、アイヌ文化の限りない発展を促す私たちの取組に参加していただければ幸いです。

私の個人的な体験に触れますと、私がアイヌの人々とその文化に初めて出会ったのは、1975年の夏のことでした。えりも岬から日高本線の列車で移動していると、不意に4人のアイヌの家族が同じ車両に乗ってこられました。おばあちゃんとお母さん、そして2人の子どものようなようでした。全員アイヌの民族衣装を着ており、その後、彼らが列車を降りるまで、私の意識は彼らに集中しました。当時16歳の多感な少年にとって、これは重要な瞬間でした。

この4名の方が代表する異文化を直接感じる事ができたのは、本当に魅力的な経験でした。そして、今考えると、この出会いが文字通り、私が更に異文化を発見し理解するための道を開き、やがて外交官として諸外国と仕事をする事につながったのです。

皆様について言えば、皆様は、英国でアイヌに出会った最初の人では全くありません。この点、1世紀半も前にアイヌと重要な交流を持った何人かのイギリス人を振り返ることが有意義です。

その好例がイザベラ・バードです。彼女は有名な英国人旅行者で、英国王立地理学会の特別会員となった最初の女性です。彼女は1878年に日本を訪れた際、北海道平取町を目的地に選びました。この旅は、当時の駐日英国公使であるハリー・パークスと、外交官であり著名な日本研究家であるアーネスト・サトウの支援を受けて行われました。平取滞在中、イザベラ・バードは熱心な観察を行い、アイヌの人々の生活と文化について極めて詳細な記録を残しました。

長い交流の歴史の中で、私たちは互いの文化の魅力を感じ取り、活かし、学び合ってきました。現在の私たちの文化的な結びつきは、今申し上げたような過去の実りある交流の賜物であることを忘れてはなりません。そして、そのような結びつきは、この展覧会を通じて、一層強くなるでしょう。

本日の御列席の中には、最近 JHL で開催された沖縄や富山に関する文化イベントに参加された方もいらっしゃるでしょう。JHL が様々な日本の地域の発見やインスピレーションの源となり、日本の文化の多様性と豊かさを示していることを大変嬉しく思います。

皆様と杯を上げる時間が到来したようです。それでは、「Ainu Stories」展の成功と、皆様の御健康と御多幸、そして日英両国の友好と協力のさらなる強化を願って、乾杯！